巻頭言

「高度情報化時代への対応を」

(株)三菱電機　顧問　伊　藤　利　朗

社会にはインターネット、企業内にはイントラネットが形成され、これにディジタル放送網が加わって、世界のあらゆる主要なコンピュータがネットワークされている。最近ではネットワークが高速化され、テキストだけではなく、静止画、動画までも交換できるようになった。その結果、家庭に居ながらにして買い物ができるようになった。暗号技術のおかげで、必要なら企業機密を保ったままで、外部の回線から企業専用のイントラネットを使うことも可能になり、決められたオフィスに出勤しなくても、会社の事務や技術開発が効率よくできるようになった。私は、このような形で今後ますます発達する高度情報化の時代をネットワークコンピュティングの時代と命名し、これに対応して生じる社会的な変化はただものではないと考えている。

考えてみると、これまでのところ、社会活動の単位は、役所をはじめとする政府公共機関や企業を始めとする法人であった。そして、多くの人々は、サラリーマンとなってこのような単位が所有するオフィスに毎日出勤して仕事をしてきた。換言すれば、、これらの単位のいずれかに属し、所定のオフィスに出勤しなければ、仕事に不可欠な情報にアクセスできなかったのである。

これに対して、ネットワークコンピュティングの時代においては、人々はなにも上述の単位に属さなくても、仕事に必要な情報が遠隔に組織を超えて利用できる。その結果、活動の単位それ自身が、有能な個人がいる一つの家庭、部品を生産する一つの生産拠点、鉄道、通信、電力、水道などの一つの網等々と、これ以上は機能上分割不可能な最小単位となろう。そしてこれらの単位がネットワークコンピュティングによって合理的に臨機応変に速やかに結合されて活動することになろう。結果として省庁・公共機関の再編、企業の合併倒産等の形で旧来の活動単位の崩壊が劇的に促されたことは明白である。

これはまさに社会革命である。江戸時代の活動単位であった藩が開国とともに崩壊し、県庁や法人などへ移行した明治維新よりもはるかに大きな社会革命であると私は考えている。そして官民が改革にのり遅れた日本社会に、この革命が襲いかかって生じたのが平成の大不況だと言いたいのである。私は、今、日本社会がこぞって意識改革に目覚めない限り不況からの真の脱出はないと考えている。

改革すべき意識とは、詰め込み教育で合格した有名校の卒業生が役所や大企業をこぞって志望し入社後は創造性よりも失敗を恐れて新時代への対応を考えようとしないこと、企業経営者が新時代への対応に必要な創造的な改革を忌避し依然として旧態然とした他社と横並びの経営を良しとすること、役人は役人で既存の権益を守ろうとして規制緩和などの合理化に反対することなどである。

そして、ネットワークコンピューティングを利用して個人の能力を個人の責任でフルに発揮できるようになった高度情報化時代において進歩的な技術者がなすべきことは、各人の担当分野で創造性を発揮すること、模糊とした未来に対して失敗を恐れずに積極的に挑戦していくこと、単に目先の経済的観点からだけではなくより広い観点から隣国を支援すること、地球環境問題、エネルギー問題解決のシナリオを書いて世界に発信しそれを自らも実践すること、情報技術がもたらす便宜性を広く世界に普及すること、情報技術をフルに活用して世界の人々が精神的に豊かに暮らす仕組みを作ること等々と枚挙に暇がない。

京都大学の電気教室の皆様、ぜひこの進歩的な技術者になって世界に貢献してください。